

森鷗外論雜記

嘉 部 嘉 隆

一

森鷗外の小説觀を云々するとき、必ずといってよいほど引用されるのは、明治四二年に發表され、石川淳によつて「わたしはこれをもつて鷗外の小説のはうでの処女作と見る。」と書かれた「追儼」であらう。しかし、鷗外の小説に論及した文章は、もちろんこれだけにはとどまらない。むしろ、鷗外の文学的出發そのものだが、「小説」に対する考え方を展開した「小説論」であり、鷗外の小説觀を展望するには、この「小説論」から始めることが最もオーソドックスな手続きであると思われる。

この、明治三二年一月三日に發表された「小説論」は、その題名の下に丸括弧で (Cfr. Rudolph von Gotsche II, Studien.) と但し

書きが付されているように、かなりの部分が、ゴットシャルの著作からの要約であり、借りものであったと見ることができる。とはいへ、最も肝腎な一箇所だけは、鷗外の本音であったと見ることもできる。

それは、最終稿「医学の説より出でたる小説論」を引用するならば、小説を作るもの若事実を得て満足せば、いづれの処にか妙想を着けむ。事實は良材なり。されどこれを役することは、空想の力によりて做し得べきのみ。ドオデエがゾラに優れるこゝに得る所ありてならむ。

ということにならう。鷗外がここで強調しているのは、事実そのものだけでは小説にはならず、想像力を駆使できてこそすぐれた作品が成り立つのだということである。事実の尊重ではなく、想像力の必要性である。

いったい、この「小説論」が発表された時期に、このような論旨の論が必要だったのだろうか。むしろ、小説とは虚構に拠ることが当然であった時代だったはずで、かんじんの鷗外独自の論旨が、全く特色もなく、必然性もなく、何のために発表されたのかと、疑問を持たざるを得ない。小堀桂一郎氏のように「彼は『小説神髓』が同時代に対して有している意義を十分に認めながらも、なおかつ、後年の文芸批評のあり方についての有名な論争が示すような、その『没理想』的傾向に対する危惧の念をここで表明しているのであるまいか。」とか「多分に今後の自分の文学活動へのあらかじめの弁護、いわば将来の道程への地ならし、といった意味がありしはなかつちろうか。」というような見方もある。しかし、ここで鷗外が、後年の自然主義を予想しての警告というような見方は、単なる買いかぶりに過ぎないと思われる。「小説論」については、すでに論じているので、ここでは「追儼」における小説観と対比して論じてみたい。「追儼」において、鷗外は、次のように小説に関して論を展開している。^(注5)

晝の思想と夜の思想とは違ふ。何か晝の中解決し兼ねた問題があつて、それを夜なかに旨く解決した積で、翌朝になつて考へて見ると、解決にも何にもなつてないことが折々ある。夜の思想には少し当にならぬ処がある。(中略)そこを思ふと僕の夜の思想はいよ／＼当にならなくなる。

(一行略)

小説にはかういものをかういふ風に書くべきであるといふ事を

聞せられてゐる。しかも抒情詩と戯曲とでない限の作品は、何でも小説といふ概念の中に入れられてゐるやうだ。(略)

(六行略)

凡て世の中の物は変ずるといふ側から見れば、刹那々々に變じて已まない。併し變じないといふ側から見れば、萬古不易である。此頃囚はれた、放たれたといふ語が流行するが、一体小説はかういふものをかういふ風に書くべきであるといふのは、ひどく囚はれた思想ではあるまいか。僕は僕の夜の思想を以て、小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだといふ断案を下す。

鷗外の小説観を論ずる者は、往々にして、この最後の「小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだといふ断案を下す」という部分だけを引用する。例えば山崎国紀氏は、この部分を引用して「すばり切り込む鷗外の意識のなかに、新しい文学創造への意欲を感じとることは困難ではない。」^(注6)と言う。しかし、前引の鷗外の文章をこのように単純に理解していいものだろうか。山崎氏は引用に当って、一文を全部引用することをしないで、かんじんの前半を省略してしまっている。そして、この前半部の引用の省略が、どのような意味を持つかに全く気づいていないのである。この文章の前半は「僕は僕の夜の思想を以て」とあり、その上で「小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだ」という「断案を下」しているのである。その「夜の思想」とは、「少し当にならぬ処があり、いよ／＼当にならぬ」^(注7)っているものなのである。従つて鷗外にとっては、「小説といふものは何をどんな風に書いても好いも

の」ではないのである。ただ、鷗外は「追儼」の中で、役所から帰って来た時にはへと／＼になつてゐる。人は晩酌でもして愉快に朝まで寝るのであらう。それを僕はランブを細くして置いて、直ぐ起きる覚悟をして一寸寝る。十二時に目を醒ます。頭が少し回復してゐる。それから二時まで起きてゐて書く。

(行略)

詩人には Balzac のやうに、夜物を作つた人もある。宵に寝かして置いた Lassally が午前一時になると喚び起される。Balzac はかう云つたさうだ。(中略) 夜は為事をするものだ。(中略) Balzac は例の僧衣を着て、部屋の中をあちこち歩きながら口授する。Lassally はそれを朝の七時まで書かせられるのであつたやうだ。併し Balzac は午前八時から午後四時まで役所の事務を執つてはゐなかつた。

と書いてゐる。自分の書くものは、あくまで本務外の余技なのであつて、書くことが本職ではないことを強調している。見方によつては、自らの書くものを非難された場合の抜け道を作つてゐるものともされるのである。鷗外は小説家としては想像力に乏しい。ある程度の事実がなければ創作ができない。そのため、「何をどんな風に書いても好いものだ」などと、かつて「小説論」で展開した論理とは、かなり異つた発言をすることになつてしまつた。自然主義に批判的な鷗外が、形の上では自然主義と同じような方法をとらざるを得ないのである。そこで、当時の自然主義文学の批評家のお題目であつたやうな「囚はれた」「放たれた」ということを逆用して、「一体

小説はかういふものをかういふ風に書くべきであるといふ考えは、ひどく囚はれた思想ではまいか」と、自然主義に一矢を放つておいて、その上で、「小説といふものは何をどんな風に書いてもよい」と自分の方法を合理化する。そして、この発言を攻撃された場合の逃げ道として「夜の思想」を強調したのではなからうか。

「追儼」における鷗外の小説観は、一文の後半だけではとらえられない複雑さを持つてゐる。もう少し前後の脈絡をたどる必要があると思う。そこで、少し「追儼」における鷗外の論理の展開を分析しておきたい。鷗外は次のようにも書いてゐる。

小説にはかういふものをかういふ風に書くべきであるといふ事を聞せられてゐる。(略)

そのかういふものをかういふ風に書くべきであるといふ教は、昨今の新発明でゝもあるやうに説いて聞せられるのである。随つてあいつは十年前と書振が変らないといふのは、殆ど死刑の宣告になる。

果してそんなものであらうか。Stendhal は千八百四十二年に死んでゐる。あの男の書いたものなどは、今の人がかういふものをかういふ風に書けという要求を、理想的に満足させてゐはしないかときへ思はれる。

凡て世の中の物は変ずるといふ側から見れば、刹那々々に變じて已まない。併し變じないといふ側から見れば、萬古不易である。此頃囚はれた、放たれたといふ語が流行するが、一体小説はかういふものをかういふ風に書くべきであるといふのは、ひどく囚は

れた思想ではあるまいか。(略)

この文章を読むと、論理的であるように見えるが、全く論理になっていないのである。「小説には……聞せられてゐる」というが、この「聞せられてゐる」内容や時期が具体的にない。鷗外もかつて「小説論」で説いたことがあった。しかし、どうやらこの文章中において、明治四十年の小説論であろう。「昨今の新発明でゝもあるやうに説いて聞せられるのである。」とあるのだから。しかし、なぜこのあと「随つて」となるのであろうか。「十年前と書振が変らないといふのは、殆ど死刑の宣告になる。」というが、十年前の書振が「昨今の新発明でゝもあるやうに説いて聞せられる」方法と同じことだつてあり得る筈である。鷗外自身、「昨今の新発明でゝもあるやうに」と言っている。ということは、昨今の新発明だとは思っていないわけである。従つて、「果してそんなものであろうか。」としてスタンダードの例を持ち出して来るのである。

しかし、そのあとがつかない。「凡て世の中の物は(中略)萬古不易である。」は、その前の文章の要約ととれないこともない。ところが、「此頃囚はれた、放たれたといふ語が流行するが」は、前文と論理的なつながりは全くないと言えよう。「流行」している現象に過ぎない。その現象を利用して、「一体」などという、接統語をくつつけて「小説はかういふものをかういふ風に書くべきである」というのは、ひどく囚はれた思想ではあるまいか。」と論を展開するのは、一種のすりかえである。このようなごまかしの上で、「僕は僕の夜の思想を以て、小説といふものは何をどんな風に書いて

ても好いものだといふ断案を下す。」と、好都合な論を披露しているのである。従つて、「追儺」における鷗外の小説論は、鷗外の逃げ道ではあつても本音と言えるかどうか疑問であらう。

二

鷗外著「舞姫」の原稿第一ページにある著者名は、紙を貼つて、「鷗外森林太郎著」と書かれているが、この貼紙の下には「鷗外漁史作」という文字が読みとれる。この書きかえは、極めて重要な問題を胎んでいると思われるのだが、長谷川泉氏が原稿複製解説の中でこの事実を指摘しているだけで、この点を問題にした論は見当らない。時間的な余裕がないため、ここでは十分に論じることができないので、問題提起だけにとどめておいて、いずれ『森鷗外研究』第三号に掲載予定の『「舞姫」についての諸問題』でくわしく論じたいと思う。

それでは、「鷗外漁史作」と「鷗外森林太郎著」とでは、どのような差異があるのかということであるが、そのほかにもう一つ考えておかなければならないのは、なぜ「森鷗外著」なり「森鷗外作」にしかなかったかということである。当時のペンネームとしては「森鷗外」と署名することが最も自然であつたと思われるからである。

「鷗外」という号の由来については、斎藤勝寿の発言^(註8)以後、いくつかの論考があるが、ここでは号の由来についての考察は省略するとして、「舞姫」の著者としての署名だけを問題にしたい。

鵜外が「鵜外」という号をはじめて使ったのは、「舞姫」である。
 (活字にしたのはと言うのが、より正確であろう)「舞姫」は鵜外が自信を持って発表した作品である。その作品に「斎藤君、君の号を貰ってしまったよ」(斎藤勝寿^(註1))というような、他人に間違われるような号だけを使ったのでは、鵜外としては不本意であっただろうと推測できる。かといって「森林太郎著」では、作品が実際にあったことと誤解される恐れもある。また、作品の発表意図との関連もあったことであろう。鵜外の一族や軍閥係に対する顧慮もあったのではないかとも思われるのである。といって「森鵜外著」では、当時の読者としては、直ちに森林太郎とは結びつかなかったであろう。そこで、当時としては異例の、号に本名をくっつけるという署名方法をとったのであろう。あえて森林太郎の上に「鵜外」とつけたのは、あくまで「舞姫」が小説であって、事実ではないことを示すためと、以後「森鵜外」と使用してもそれが森林太郎であることがわかるようにしたためではなからうか。

いずれにしても、著者名がモチーフと複雑にからみ合っており、そこに鵜外のいろいろな計算が含まれていたと推察できるのである。長谷川辰之助が「二葉亭四迷」と称したことは全く意味が異なると考えなければならない。

三

鵜外の「独逸日記」が「在徳記」を書きあらためたものだという

ことは、ほぼ定説化していると言つてよいであろう。そこで、この「在徳記」がどこからか「小倉日記」のように忽然と出現しないかというのが、鵜外研究者の誰しもが抱いている希望であるが、これはまず絶望に近いと言えよう。それにしても、大多数の研究者が、「在徳記」らしい文献に触れた論を見逃してしまっている。伊藤至郎著『鵜外論稿』は比較的世に知られているが、この著書のもととなった、岩波書店刊『文学』に載った伊藤至郎の「鵜外論稿」は、単行本所収のものと同じと見做されてか、あまり読まれていないようである。この文中に、「留学当時の彼の日記が惜くも失はれてしまつたために」とあり、注記に

わたしは過ぐる日、鵜外の御令弟の森潤三郎さんからおききました。鵜外留学時代の日記類が残つてゐたのであつたが、保存の仕方がいけなかつたために、文字を判読することが出来なくなつてしまつたので、焼却されたのだといふ。

と書かれている。この直後に岩波版第一次『鵜外全集』が出て、それには「独逸日記」が収録されているのであるから、ここで森潤三郎が語つたという焼却された日記は「在徳記」であつた可能性が大きい。「独逸日記」として書き直したため、「在徳記」は極めて粗雑に保存され、焼却されてしまつたのではなからうか。そして、潤三郎の知らないところで大切に保管されていた「独逸日記」が、岩波版全集の刊行とともに公開されたのではなからうか。

伊藤至郎は、単行本『鵜外論考』において、「独逸日記」を大きく扱っているが、前記の『文学』における注記に関して、全く触れ

ていない。従って、伊藤至郎の紹介する、森潤三郎の証言がどの程度の信憑性を持つものであるかは、一概に判断しかねるところがあるが、「在徳記」の行方を示唆する文献の一つであることは認めていいのではなからうか。

四

世には、ずいぶんとお手軽な鷗外論も多いが、吉川幸次郎氏や大岡昇平氏が支持したと「あとがき」にある、大谷兎一著『鷗外、屈辱に死す』（人文書院 昭58）もその一冊である。あとがきの後に、「参考文献」がずらりと並んでいるが、それにしてもあまりに初歩的な誤りが多すぎる。以下、気づいたところを列記してみよう。

まず、4ページの遺書の引用であるが「生死ノ別ル、瞬間」が「生死別ル、瞬間」となっている。この「ノ」の脱落は、いろんな鷗外研究書に対して、長谷川泉氏が繰返し指摘しているにも拘らず、ここでもまた、誤られている。参考文献中には長谷川氏の著者もいくつか入っているにも拘らず、である。

次に18ページ。「二葉亭四迷は印度洋上で投身自殺をしてしまう。」これには恐れ入った。新説である。二葉亭四迷は、たしかにロシアより帰国の途上、印度洋上で死んでいるが、肺結核による病死であり、投身自殺ではない。播磨灘で投身自殺した生田春月と勘ちがいでいるのではないか。

24ページ。「『独逸日記』から、同棲していたと言っているエリー

ゼ・ビーケルトのことを一字残さず抹消した。」と書いているが、何を根拠に「同棲していたと言っている」と書いているのか。

29ページ。「妹の小金井喜美子が見舞いに來たが、君子と誤って記した。鷗外らしからぬことである。」と言うが、喜美子が君子と書かれている例は多い。別に誤ってのことでもなく、鷗外らしからぬことでもない。鷗外は原田直次郎も直二郎と書いたりしている。

33ページ。「石橋忍月と（中略）美醜の問題につき応酬をくり返した。」とあるが、忍月の方の論は読んでいるのだろうか。もし読んではあれば「応酬をくり返した。」などとは言えぬ筈である。また、「有名な没理想論争が行われたのは、二十三年から翌年にかけてであった」と記しているが、二十三年ではなく、二十四年からである。

40ページ。「賀古が）明治二十一年に、内務大臣の山県有朋に従って欧米を回つた。」と書いている。これは必ずしも間違いとは言えないが、二十一年の十二月に出发し、二十二年の十月に帰国しているのだから、正確とはいえない。

54ページ。「エリーゼは築地の精養軒ホテルに滞在し、ドイツへ帰る様子がない。（中略）弟の篤次郎が小金井良精に知らせたのが、二十四日である。妻の喜美子は鷗外の妹だが、初めてそれを知り、ひどく驚いた。」この部分も誤解を生じる。この文章だけなら、喜美子は良精が篤次郎かに聞いたと読み取れるが、小金井喜美子の「森鷗外の系族」では母親が喜美子に知らせたと書いている。もっとも、この喜美子の著書もエリーゼに関しては誤りが多いが。

90ページ。「この短篇（『半日』のこと―注・嘉部）こそ、小倉に

左遷されてからの長い沈黙を破った作品なのである」これも厳密には正しくない。その前に極く短かいながらも「朝寝」(明39・11『心の花』)や「有楽門」(明40・1『心の花』)が書かれているからである。

112 ページ。「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「佐橋甚五郎」の三編をまとめて本にして書名を『意地』とつけ」とあるが、鷗外の初案は『意地』という書名ではなく、『軼事篇』であったが、わかりにくいということで『意地』に改められたのであって、はじめから鷗外の意地を書名に托したと考えてよいものかどうか。

114 ページ。「漱石は修善寺で胃潰瘍のため吐血し、十月帰京して入院した。鷗外は見舞いの涓滴を贈った。心ばかりの品という意味」この部分など噴飯ものである。涓滴にはたしかに心ばかりの品という意味もあるが、ここでは鷗外の作品集『涓滴』である。

136 ページ。「兵隊には脚気も多かった。鷗外はその調査研究に尽くし、玄米常用による予防、ビタミンBによる治療法を確立した。」この部分もおかしい。鷗外は脚気の調査研究に尽くしはしたが、脚気は細菌によるものと信じていた。玄米常用を実施したのは小池正直である。

144 ページ。「母との仲が陰悪だったころ、志げの気をまぎらすために小説を書くことをすすめた。志げは七篇を書いて、鷗外が手を入れた。」しげが書いた小説の数は二十篇を超す。多分、『鷗外全集』第38巻の「参考篇」に収録された『あだ花』は七篇しか収録されていなかったもので、調べもせずにしげの作品はこれが全部だと早合点

したことを思われる。

以上、気づいた間違いを指摘したが、論理としても少しおかしいところがある。178 ページ「ここまでしても、位階は必ず上げる。すると、沙汰のなかった栄典を、鷗外が前もってやめさせたのだと人は理解する。それは、男爵である。」なぜこういう論理が成り立つのか。位階が上がることも栄典であろう。なぜ男爵だけを栄典と限定して考えるのかよくわからない。

著者はこの書を小説風に書いている。従って、論理や事実など大して重要なことではなく、鷗外の心象風景を描いた小説、一種の仮説を小説として展開したと受取るべきなのであろう。

五

学研刊の「明治の古典」第八巻『舞姫 雁』(井上靖 訳・編)にも、おかしなところがある。「舞姫」の現代語訳は原文の調子をよく生かして良い訳だが、部分的な解釈の誤りがある。時間的余裕がないので、部分的な誤りは無視することにして、大きな問題だけを指摘しておきたい。

171 ページに「エリス論争」という項目がある。これはどうやら「舞姫論争」のことらしい。文中に「世にいう『舞姫論争』、あるいは『エリス論争』と呼ばれるものである」とあるが、「エリス論争」などという論争名は寡聞にして、聞いたこともない。

185 ページ『舞姫』のエリスと同名のドイツ女性のはるばる鷗外を

頼つて来日するが、鷗外は会わなかった。」と書いている。この書より先に、星新一の「祖父・小金井良精の記」によって、鷗外がエリーゼに会っていることは定説になっている段階である。昭和十年代に、小金井喜美子は、鷗外が帰国するエリスを横浜まで同行して見送ったと書いている。

六

「四」「五」において、二書の誤りを指摘したが、まだ取上げなければならぬ鷗外論も数多い。著者自身の編著にしても誤りがいくつも見つかっている。いずれ時間に余裕ができれば、「舞姫」を中心として、鷗外論の徹底的な検討を行ってみたいと思っている。

注

- 1 三笠書房、昭和16年12月5日発行の初版本に拠る。
- 2 初出は「小説論」と題して、「医学士 森林太郎」という署名で、『読売新聞』（明治二十二年一月三日）に発表された。さらに大幅に改訂されて『しがらみ草紙』第二十八号に再録され、署名はなく、「医にして小説を論ず」と改題されている。最後に『月くさ』（春陽堂、明29）に収録され「医学の説より出でたる小説論」と改題、再び大幅に加除訂正されている。この経緯に関しては拙著『森鷗外——初期文芸評論の論理と方

- 法』（桜楓社、昭55）中の『小説論』改稿の意図と方法」「小説論」の論理」中に詳述してあるが、鷗外の小説観を最も簡潔に理解しやすく記述されているのは最終稿と思われるので、本論では最終稿の本文を使用して論ずることにした。
- 3 『若き日の森鷗外』（昭44、東京大学出版会）中の「第三部文学観の系譜 1『小説論』」

- 4 『森鷗外——初期文芸評論の論理と方法』（昭44、桜楓社）
- 5 「追憶」本文の引用は、『涓滴』に拠る。

- 6 『森鷗外へ恨みに生きる』（昭51、講談社現代新書）
- 7 『森鷗外自筆草稿』複製（昭35、上野精一氏私家版）
- 8 『明星』第三卷第三号（大11・8）所収「通夜筆記」

- 以下、最近では『鷗外』誌14号・15号に、岡田正弘氏、中井義幸氏の論考がある。

- 9 注8に同じ

- 10 昭16・10 光書房発行。昭24・増補版 学芸社発行。

- 11 『文学』第三卷第十号。昭10・10。

付記

鷗外と小堀氏との文章は、引用の際漢字は本字体を使用した、殆ど新字体に植字されている。時間に余裕がなく、初校だけしかとれないので、新旧字体混同のまま放置した。